

# 神奈川小児科医会ニュース

第13号

平成17年7月31日

横浜市中区富士見町3-1 TEL 045-241-7000 FAX 045-241-1464

## 「最近思うこと」

神奈川小児科医会 会長 寺道由晃  
(横浜市中区 寺道小児科医院)

昨年、日本小児科医会が日医総研に委託した研究「小児医療のグランドデザイン」が報告され、日本小児科医会報(No. 28)に要約版が掲載された。お目通しと思うが、改めてご一読願うとして敢えてまとめると、小児医療の現状と疾病構造、受療状況の解析、小児医療費の国民総医療費に占める割合、乳幼児医療費助成制度の現状分析、小児救急医療の受診動向と救急医療体制の現状の分析、小児科医師数の推移等々を大変に要領良く整理し、関連報告書・文献を漁ることなく知ることができるのもありがたい。

この報告書を受けた形で日本小児科医会では「小児医療の今後を考える委員会」が具体的検討を始めたと思われる。一方、小児科学会、日本小児保健協会と合同、所謂三者協で、「(仮称)小児保健法」の創設への動きも進められている。昭和57年「老人保健法」が施行され、老人への手厚い保護が医療・保健・福祉と幅広く行われるようになった。その恩恵は老人自身のみならず、広く国民が実感するところで、歓迎されている。

これに較べて、国の将来を担う小児への施策は、はるかに拙いと思うのは小児科医の僻みだろうか。いや苛立ち、憤慨すら覚える。特殊出生率1.57ショックの言葉が取り沙汰された頃から社会全体で少子化問題が取り上げられるようになって、副次的に小児への施策も及ばずながら芽は出しているがまだ散発的に過ぎないと思われる。国を挙げて子供に、特に健康に関心を持って欲しいという趣旨で、日本小児科学会が提唱した「こど

もの健康週間」がスタートしたのは平成2年であった。毎年10月の第2週を当て、全国集会や各県の地方会、小児保健協会、小児科医会が講演会、街頭健診、育児相談などを繰り広げている。しかし、その認知度は必ずしも高くなく、後発の看護週間のそれに及ばない。プライマリーケアの場に身を置き、患児、保護者そして地域社会の人々に直接対面する我々医会員もこの精神を意識して、「週間」はもちろんのこと日常的に啓蒙し、「小児保健法」創設への国民的合意、推進に寄与したいものである。「こどもの健康週間」では、鎌倉の増田先生は当初から毎年欠かさず市民を対象とした講演会を企画・実践し続けておられる。まさに敬服の一語に尽きる。

近年小児救急医療は国、自治体共に重要施策のひとつに位置づけている。小児医療のグランドデザインでも1項を占めているが、初期対応、2次、3次救急いずれの場でも小児科医の積極的参加で成り立ち、また充実させて行くものである。救急医療は小児科医の密度、初期、2、3次医療機関の配置状況などそれぞれの地域の置かれた条件で、それぞれ独特な体制になるべきものである。現在、各地域の医師会を中心に自治体との共同作業として小児救急対策は進展を続けている。一方、かかりつけ医としてこの体制の中での我々の在り方も考えねばなるまい。昔、開業医は夜毎急患に起こされ、休日の計画も取り止めなどという憂き目も少なからずの状況であったが、近年は夜間・休日救急体制の中で、翌日に「昨日これこれしか

じか」と報告を受け、「そうだったのか」と診療する場合が多い。可能な条件の中で、この体制に参加し、責任の一端を担いたいと思う。救急患者の中には、所謂救急でなく、明日まで待てると思えるケースが少なからず、初期救急、2次救急共にそれぞれ4割、3割を占めるというデータもある。しかし、保護者にとっては一刻を争う急患であって、受診を拒絶することは適切ではない。しかし、所謂患者教育の必要性も話題に上げねばならない。厚労省研究班の検討を経て、昨年4月か

ら広島県、大分県などからスタートした「小児救急電話相談事業」は、まさに打ってつけの場であると考えられる。本県では7月1日から紆余曲折の上、こども医療センターが引き受けてスタートの予定にまで漕ぎ着けた。午後7時から10時までの3時間だが、感謝と共に心から敬意を表する。先行の経験では概ね好評と聞く。今回の実績、評価の上で、改善・拡大できるものであることを期待する。

## 日本小児科医会・公衆衛生委員会報告

神奈川小児科医会 副会長

日本小児科医会 公衆衛生担当常任理事 竹本 桂一

(川崎市中原区 竹本小児科医院)

日本小児科医会公衆衛生委員会の担当は、昨年16年5月の名古屋の総会の際、指名されました。7年有余に亘って名理事として勤められた大川一義先生(横浜市)の後を引き継ぐことになりました。新任ということで上席に桑原正彦先生(広島県小児科医会会長)が統率してくださっています。医会誌にも書かせていただきましたが、委員長の吉田忠先生(東京都)を中心に多くの委員が留任してくださり、恙無く委員会の事業が継続されております。横浜市の三宅捷太先生、川崎市の畑啓一先生と一緒に仕事をしてくださっているのも心強い限りです。

公衆衛生委員会は現在6つの課題に取り組んでいます。

### 1. 重症麻疹患者調査

調査開始から、麻疹制圧運動との連動か否かは分かりませんが、年々減少してきております。

### 2. 1歳児の予防接種済率調査

1歳児健診を利用した聞き取り調査での実数報告を中心に置いております。一部の地域では、1歳代ということもあり、今後の課題でもありません。接種率は、年々上昇してきております。

### 3. 学校保健調査

学校専門医制度、心理専門員の配置などの学校内現場が動いている中で、小児科医はこのままでいいのか、何かもっと関わりを持つことが必要なのではないかという点から調査をしております。

### 4. 予防接種の広域化、無料化調査

予防接種の広域化に対しては、県単位・数市町村単位など、少しずつ発展しています。無料化問題も含めて調査しております。但し、安全性を無視することは出来ません。今回厚労省の期限切れワクチン接種医療費もその点を考慮したものかもしれません。

### 5. 「子どもの予防接種週間」

今期は、医療機関・接種者数共に増加してきております。時間の問題や季節には再考を要する点もあります。

### 6. 麻疹制圧運動報告書Part II 発行

平成12年以来5年計画で、“麻疹制圧運動”を展開して参りました。目標年に達した今、罹患患者数は、減少してきた感触を得ていますが、全国各地の取り組みの成果を記録し、将来の事業展開に備えるために発行します。

以上の6課題に取り組み、医会セミナーや、日本小児保健学会に発表して、会員の皆様のご批判・ご意見をいただいております。これらのデータは、各県・各会員にアンケート調査という形で行われるため、回収率の問題や、市町村合併による定点の変更等で、頭の痛いところでもあります。これらのデータは発表するだけで終わらせることなく、三者協や、厚労省との折衝に活かされております。

## 第22回神奈川小児科医会総会 特別講演

### コプリック斑のわが国への受容 — 麻疹の歴史の一断面 ①

日本医史学会 常任理事 深瀬 泰 且  
(川崎市川崎区 深瀬小児科医院)

#### はじめに

現代ではワクチンのおかげで、ハシカにかからずに一生をおえるものもいるが、昔といってもついこの間までは、この世に生をうけてこの病いにかからずにすむものは一人もいなかった。このように人の一生においてこの病いと関係がなくなってしまうと、名称すら忘れ去られてしまうのではないかとさえ思えるほどに、耳にする機会が少なくなりました。とはいえ国際的にみるとわが国における発症は決してすくないとはいえない。日本は麻疹の輸出国だ、おおいに迷惑をこうむっている、とアメリカからは名指しで非難を浴びているのが現状である。

その麻疹の早期診断において強力な威力を発揮するといわれているコプリック斑が、どのように小児科学界に登場したのかを明らかにするとともに、これがわが国へ受容された経緯を追究したい。

#### 麻疹の歴史

麻疹の流行がわが国の史書に登場するのは長徳4年(988)のことで、僧皇円によって平安末期に書かれた『扶桑略記』には、この年の疫病を

夏より冬にいたり疫瘡あまねく発し、六、七月の間、京師の男女死するもの甚だ多し、……世にこれを赤斑瘡という

と記されている。赤斑瘡は「アカモガサ」と読む。「モカサ」とは天然痘をいい、麻疹の発疹がこれに似てはいるものの、赤味が強いのでこのように名付けられた。この他には麻子、疹子、麤瘡などもよばれていた。

鎌倉時代になって梶原性全が嘉元元年(1303)に著した『頓医抄』において、麤瘡に「ハシカ」という読みを付した。ハシカにかかると喉のあたりがいらいらするので、この感じをあらわす「はしかい」

という形容詞から転化した言葉を使用したのである。「ハシカ」というのは鎌倉時代の造語といえよう。

『妙法寺記』の永正10年(1513)の条に「この年、麻疹世間に流行すること大半に過ぎたり」とあり、これが麻疹の初出であるといえよう。ハシカは天然痘にくらべるとはるかに細かな発疹を生ずるので、「麻の実のような細かな発疹」という意味で、麻疹とよばれるようになった。

面白いことに西洋でも発疹の大きさに注目しており、オランダ語で麻疹をmazelen とよんでいるが、やはりこれは「小さな発疹」という意味で、mazer という単語の縮小形である。

英語ではご承知のようにmeasles だが、このような現在の単語に定着したには17世紀である。それ以前の15、16世紀にはmazil とかmeazellという単語が使われていたことは、『オックスフォード英語辞典』にあげられている。

現今のようにいろいろな疾病をきっちりと区別できなかった時代にあっては、病名においても混乱がみられたのは仕方がないことであろう。しかしこのような混乱も17世紀にはいると次第に整理されて、1629年には現今のmeasles がロンドンの死亡統計表に一項目として登録されるようになった。それともなって「イギリス医学の父」とも「イギリスのヒポクラテス」ともよばれて、その医学的業績が賞賛されていたトマス・シドナムが、1692年に、麻疹の臨床症状を明確に記載して診断基準を明らかにした。

洋の東西を問わず麻疹の病名として用いられた言葉が、皮膚にあらわれた発疹の様相に目をそそいだ結果であるのはなかなか興味深い。臨床検査がなかった時代では、打診や聴診とともに、目でみて診断をつける視診もまた重要な診断手技なので、発疹を

手掛かりとして診断をつけようとした医師たちは、発疹の特徴を把握して、それによって病名を考案したのである。

病名の変遷をみると先人たちがその疾患をどのように扱ったかの苦勞の跡がしのばれるとともに、その病気にたいして抱いていた疾病観や、さらには医学観さえ垣間見ることができる。

### 口腔粘膜小斑点の歴史

麻疹のさいに口腔粘膜に発疹—粘膜疹—がみられることはコプリック以前から報告されていた。またこれが早期診断にさいして重要な手掛かりになることも古くから知られていたようである。オピッツとシュミットが編纂した有名な小児科教科書(1971年)に収載されたアルブレヒト・パイパーが執筆した小児科学史には、この小斑点をみとめた医師としてジョン・キール(1778年)、J・A・マーレイ(1785年)、カール・ゲルハルト(1861年)など数名の名があげられている。ここではニル・フェロドロヴィチ・フィラトフを取りあげてみたいと思う。

小児にみられる発疹性疾患に、麻疹、風疹、猩紅熱につづいて第四番目に位置する疾患として「第四病」とか、「フィラトフ・デュークス病」がある。いまではすっかりみられなくなってしまったが、戦前から戦後の早い時期にかけてのわが国の教科書にも記載されていたのを記憶されているであろう。

フィラトフはモスクワ大学小児科学教授で、ロシアばかりでなく、世界の小児科学界に偉大な貢献をしたロシア小児科学の父として有名である。かれは1885年に、麻疹の前駆期において口腔粘膜に白いリングにかこまれた、小さな赤い斑点を記載した最初の一人であるという。そこでかつてのソ連邦では、「コプリック斑」ではなく「フィラトフ症候」とか「ベルスキー・フィラトフ症候」とよんでいた。これをみると、コプリックの報告より10年ばかり早いので、ソ連邦の医師コルティピンは、「ロシアの医師に先取権があるにもかかわらず、外国の文献ではこれはコプリック斑として知られている」とのべている。

ロシア人は「第四病」は、イギリスの医師クレメント・デュークスより15年も早く発見したといい、伝染性単核症もエミール・パイフェルよりも3年早く発見したとあって、ロシア人の先取権を主張している。かれらは飛行機やロケットの発明がロシア人の手になるものだ、とよく主張しているのだから、いかにもロシア人らしい発想だといわなければならない。

### ヘンリー・コプリックの略歴

ヘンリー・コプリックは1858年10月28日にニューヨークに生まれた。ニューヨーク市立大学卒業後、コロンビア大学医学部で医学を修めて1881年にトップで卒業して、ハーゼン賞を受賞した。その頃の仕来りに従ってベルリンやウイーンに留学して、1886年にニューヨークにかえって一時開業医生活をしてしたが、その後グッド・サマリタン病院の勤務医となった。コプリック斑について報告したのはこの頃のことである。

かれの臨床家としての腕には素晴らしいものがあった。ほんの数分の診察で、かれの鋭い感覚から見落とされる症状はほとんどなかった。当時はまだ診断用のレントゲン装置が開発されていなかったのだから、胸部の病変の診断には打聴診に頼らざるをえなかった。コプリックはこれらの診断手技に熟達しており、かれの繊細な胸部打診はピアニストのような芸術的技術をもっていたといわれている。当時よくみられた疾患の一つである膿胸の診断は、かれのもっとも得意とするところであった。

ニューヨークの医学界における傑出した存在として、また優れた臨床家としての評判はおおいにたかまり、ニューヨークの近郊から診察をうけにくる子どもは日増し増加した。ニューヨークにすむ子どもは、だれでも一度はかれの診察をうけることに一種の誇り感じて、どこも悪くないのに診察をうけにくる健康な子どもがでる始末であったという。

コプリックは1927年4月30日に死亡した。

(第14号に続く)

# 小児科医の人材有効活用に関する研究

## ～ 研究的小児科医バンクシステムの運用について ～

(第16回日本小児科医会セミナーポスターセッションにて発表 (札幌))

三宅捷太<sup>123</sup>, 辻本愛子<sup>123</sup>, 加藤達夫<sup>12</sup>, 相原 雄幸<sup>12</sup>, 相見基次<sup>12</sup>, 有本泰造<sup>12</sup>, 梅原 実<sup>12</sup>, 甲斐純夫<sup>12</sup>, 郡 建男<sup>12</sup>, 古賀伸子<sup>123</sup>, 小島碩哉<sup>12</sup>, 後藤彰子<sup>12</sup>, 寺道由晃<sup>12</sup>, 豊沢隆弘<sup>123</sup>, 土井 啓司<sup>12</sup>, 新納憲司<sup>12</sup>, 保坂シゲリ<sup>12</sup>, 松井一郎<sup>12</sup>, 松山秀介<sup>12</sup>, 森 哲夫<sup>12</sup>, 矢崎茂義<sup>12</sup>, 横田俊平<sup>12</sup>, 渡辺幸恵<sup>123</sup>

神奈川小児科医会<sup>1</sup>・子どもの健全育成を語る会<sup>2</sup>・横浜市行政医師会母子保健検討委員会<sup>3</sup>

急速な少子高齢化は、家庭や地域の育児力低下をもたらし、子育てが不安が増強し、児童虐待問題や情緒発達障害ばかりでなく、小児救急・母子保健・予防接種などの厳しい小児医療の課題をつきつけている。その結果、少数の小児科医に過剰な負担をかけ、医学生の小児科志望を減少させ、若い医師の小児医療離れを促進させている。

次世代育成のために小児科医の役割が今こそ求められているときだけに、迅速な解決が待たれる。小児救急医療の体制整備、小児医療の不採算性の改善、女性医師の診療継続支援などが検討されている。この一助として、限られた小児科医の経験・能力を最大限に発揮できる人材有効活用のシステム構築も期待されている。

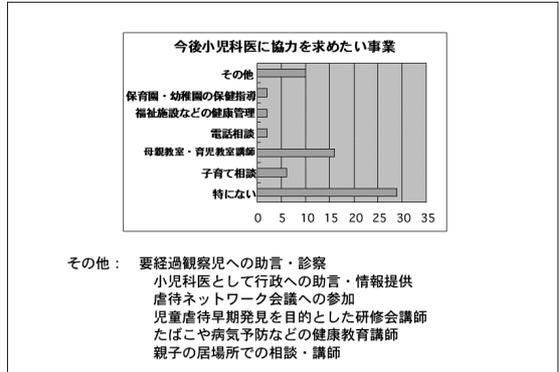
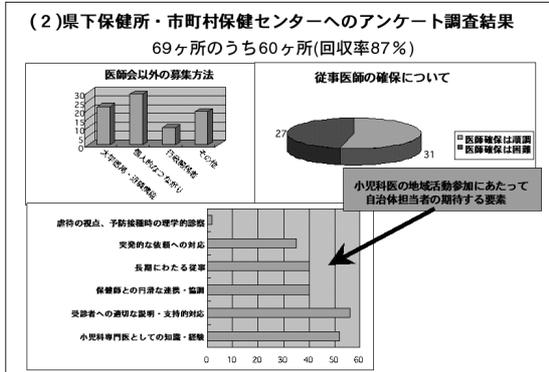
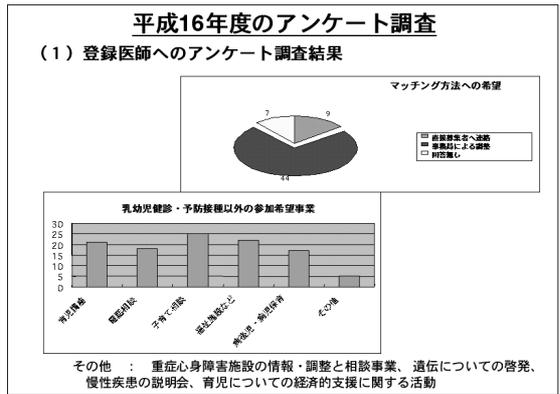
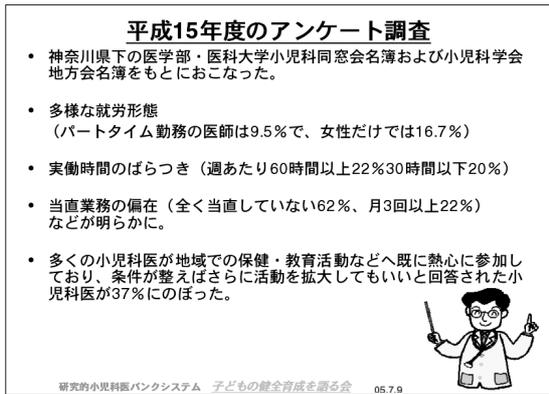
今回われわれは、このようなシステム構築を指向して、神奈川県下の小児科医の協力を得て、研究的小児科医バンクシステムを立ち上げたので紹介する。

この研究的小児科医バンクシステムの概要は、事務局は小児科医に登録に際し希望の事業や個人情報の提

供をいただく。同時に、行政など事業者から協力依頼の申込みを受ける。事務局は登録医師に郵送またはE-Mailで事業番号を付して一覧表で情報提供し、医師からその番号で協力可能な事業の連絡を受け、調整した後に事業者に連絡する。事業者は登録医師に連絡し打ち合わせの上協力をいただく。

この研究的小児科医バンクシステムは、平成17年度には県下188人の登録医の協力を得て、各行政機関から200件を越える母子保健事業・予防接種事業の協力依頼があり、マッチングを開始している。

今後の課題として①守秘義務②全県下への事業拡大③事業の内容の充実④事務事業の安定化などがあげられ、関係各位の協力を得て、よりよいシステムに育てていきたいと念じている。





# 公立大学法人横浜市立大学附属市民総合医療センター 小児総合医療センターのP-ICU開設にあたって

公立大学法人 横浜市立大学附属市民総合医療センター  
小児総合医療センター部長

相原 雄幸

神奈川小児科医会会員の先生方におかれましては日々の診療などに御活躍のことと存じ上げます。

さて、横浜市立大学附属市民総合医療センター、通称「市大センター病院」が開設されて5年が経過しました。この度、中田横浜市長の肝いりで決定した中期政策に基づき当小児科は平成17年3月28日に「小児総合医療センター」と名称を改め、小児集中治療室（P-ICU）2床を小児病棟内に新たに開設致しました。これまで長年要望してまいりましたP-ICUが当小児総合医療センターに設置されたことは大変喜ばしいことであると思っております。特に、重症の小児患者の治療にはP-ICUは不可欠な設備であるとされてきています。残念ながら県内においても新生児集中治療室（N-ICU）の普及と比較して、P-ICUが設置されている医療機関は限られております。今後、当小児総合医療センターはP-ICUを十分に活用しこれまで以上に重症小児患者の受け入れを充実してまいりたいと考えております。

今回開設しました小児総合医療センターの理念は1）小児教育と小児科医の育成、2）救急医療の充実、3）高度医療の提供を3本柱として運営致します。まず、小児教育と小児科医の育成につきましては、医学部学生教育、前期臨床研修医教育（平成16年度から小児科研修が全員義務化）、後期臨床研修（小児科専門医教育）、小児科各専門分野教育ばかりではなく、開業医師への啓発なども含みます。さらに、産休明け小児科女性医師に対する再教育を実施致します。また、看護師、救命救急士や養護教諭などに対しましても小児教育を実施致します。これまで平成15年度から開催してまいりました公開シンポジウム「子どもの医療・健康を考える」などを介して市民へ小児疾患についての啓蒙を行い小児医療についての情報発信を継続してまいりたいと考えております。

次に、小児救急医療体制につきましては、小児救急担当医が24時間体制で対応致します。さらに、外部から小児救急担当医師への直通電話（P-line）を設置致しました。これまで以上に円滑に救急患者の受け入れができるものと期待しております。このP-lineの番号の開示につきましては、まず夜間急病センターと休日診療所から始め、徐々に範囲を拡大していく予定でおりま

す。また、これまでと同様に二次救急ならびに救急隊からの依頼につきましては24時間365日体制を継続致します。前述のように、重症小児患者の受け入れにつきましては、P-ICU開設により円滑に行うことができるものと考えております。高度医療の提供につきましては、これまでも実施してまいりましたが、今後も同様に医学部小児科と機能分担し実施致します。なお、本年4月からは小児循環器患者の入院治療につきましては福浦医学部を主体に行うことに変更致しました。

さて、平成16年の当小児科の実績としましては、総入院患者596名、病床利用率90.5%、平均在院日数14.5日、外来患者総数16,489名、1日平均67.0名、紹介率47.8%、逆紹介率45.4%でありました。前年に比較し増加傾向にあります。このような実績が得られましたことは日頃からの先生方の御支援によるものと感謝しております。

ところで、平成17年4月からは横浜市大も独立行政法人化され、大幅な変革の時代に入りました。われわれ教員には採用期間の任期制と年俸制が導入されました。独法化はこれまでとは、全く異なる制度であり、我々当事者も戸惑っている状況であります。法人化により、これまで実施できなかったことも比較的容易に可能になるなど改善される点もあるようですが、逆に採算性がより重視され規制されることも多くあるようです。小児医療においては採算性だけで片づけられない問題も数多くあります。今後の推移を注意深く見守り、独法化のなかでの小児医療の改善に向け努力してまいりたいと考えております。

最後に、当小児総合医療センターはP-ICU設置で完成したわけではありません。これは始まりであると思っております。将来的には現在二つの病院に別れている小児科を統合し、さらに小児の外科系診療を充実することが機能的さらに効率的にも望ましい姿であると考えております。しかし当面は小児の内科系疾患を主体とした診療を行ってまいります。大学病院としての三次高度医療から、地域医療機関としての二次医療にこれまで以上に貢献して参ります。今後とも先生方からの御支援・御鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

## “公設民営”の「横浜みなと赤十字病院」が4月よりスタート

寺道 貴 恵（横浜市中区 寺道小児科医院）

横浜市中区根岸にありました横浜赤十字病院と、新山下にありました横浜市立港湾病院がこの4月から“公設民営”の「横浜みなと赤十字病院」として、新たなスタートをきりました。

前者は81年間、後者は43年間の長期に亘り、地域の一般病院として市民への医療提供、また開業医との病診連携の中心的存在として、地域医療に大きく貢献されました。

ここに、改めて両病院に関わった諸先生方、多くの関係者の方々に感謝申し上げます。

「みなと赤十字病院」の新体制に対しましては、地域の住民や医療関係者から不安の声が囁かれていた事も事実です。365日24時間体制の実現に対しても、マスコミや患者さん同士の情報交換が盛んな昨今、かなり不信感を抱く声を耳にされた開業医の先生方も少なくないと思います。

しかしながら、病診連携をはじめ、地域医療への貢献に対するシステムは非常に充実しており、新体制がスタートして約3ヶ月が経過した現在、謳い文句通りにすすんでいると感じております。

われわれ地域医療に携わる者の一員として、大変心強く日々の診療を営ませて頂いております。今回は、この記事に掲載するに当たりまして、「みなと赤十字病院」小児科部長に就任された川野 豊先生にお話を伺うことができました。以下、対談形式で新病院の体制を紹介させていただきます。

**寺道**「川野先生、今回神奈川小児科医会ニュースに病院紹介の記事を掲載させて頂くことになりました。ここで、新体制について色々お話を伺わせてください。

まず、一般診療について大まかなご紹介をお願いいたします。」

**川野先生**「当院小児科では、一般小児科の診療はもちろん、日本小児科学会小児科専門医研修施設になっており、アレルギー・免疫・神経・循環器などの専門医が幅広い診療を行っています。乳児健診や予防接種などお子さんの健康維持のための医療にも努めています。外来は原則として午前が一般診察で、

午後は予約による専門外来が中心です。小児医療の特徴である急性疾患には予約外で対応しております。独立した小児病棟での入院に際しては、家族の希望に応じた入院生活ができるよう配慮されています。また、院内学級があり、学童の教育を考慮した治療も可能です。」

**寺道**「ありがとうございます。」

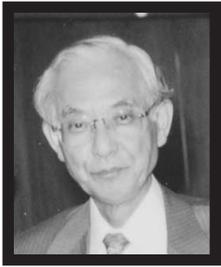
次に、当初から謳われていました24時間365日体制につきましては、まだスタッフ数もそろわないままで大変苦労されていることと思います。実際、私も開業医や地域住民は大変期待しておりました。新体制スタート後、謳い文句通りに先生方が対応されていることには、大変感謝しております。救急体制をはじめ、新体制について紹介していただけることがありましたら、是非教えてください。」

**川野先生**「当院小児科は、24時間365日救急に対応すべく、当直・夜勤体制を整えております。近隣の開業の先生方からの診療依頼にお答えすることはもちろん、夜間・休日に急変された小児の患者さんの受け入れも24時間行っています。横浜市輪番救急にも参加し、横浜市の小児救急医療体制の中での責務を果たしております。

また、アレルギーセンターの協力のもと、小児アレルギー疾患患者を積極的に受け入れ、難治性小児免疫疾患の治療も行います。日本アレルギー学会認定教育施設になっており、専門医療が受けられます。

その他、新生児集中治療施設（NICU）6床を有し、産婦人科との協力において横浜市母児2次救急システムに参加しています。また、各診療科との協力体制のもと、障害児合併症医療もおこなっています。」

**寺道**「川野先生、本日はお忙しいなか、お時間を頂きまして誠にありがとうございました。これからの、みなと赤十字病院の発展と諸先生方の益々のご健勝をお祈り申し上げます。今後とも、地域医療の発展にご協力いただけますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。」



## 廣瀬 誠 先生 を 偲 ぶ

高 宮 光 (横須賀市 高宮小児科医院)

横須賀三浦小児科医会長の廣瀬誠先生(享年75歳)が今年の元旦にミャンマーで逝去されました。前号で「横須賀三浦小児科医会について」を投稿されたばかりでした。次の号で先生の追悼文を書かなければならないことは大変悔しく残念でなりません。

横須賀三浦小児科医会は先生が、お一人で企画運営されていたようなもので、まさに大黒柱を失った状態であります。また先生は会員の精神的支えでもありました。個人的な話で恐縮ですが、13年前小生は開業直後に父を亡くし、先生が父の後輩であったこともあり、それ以来父のように慕ってまいりました。今回ミャンマーに出かけられる直前に「今、君のお父さんの事を書いているんだよ。」という電話があり、それが先生との最後の会話になってしまいました。

先生は昭和29年慶応大学医学部を卒業され、昭和37年に横須賀共済病院小児科に勤務され、昭和48年から平成元年に定年退職されるまで小児科部長として地域医療に多大な業績を残されました。定年後は横須賀共済病院看護専門学校副校長として、横須賀北部共済病院小児科の顧問として御活躍され、平成6年より広瀬小児科医院で難病の患者さんを中心に診療されておりました。

平成5年から毎年年末年始の8日間、先生はYMCA主催のミャンマーへの医療ボランティア活動に参加され、団長を務められておりました。イエジン村という首都ヤンゴンから400km離れた僻地での巡回診療を行い、マラリア、結核、種々の細菌感染症等、正味3日間で600人以上の患者さんを診察します。

第13回となる今回は、YMCA主催による最後の活動でした。先生には糖尿病の持病があり、出発する前からすでに体調を崩し、食欲がなかったようでした。12月の上旬に往診の帰りに低血糖発作を起こし、1日だけでしたが入院もされておりました。101歳になられる御尊父の茂先生も大変心配され、今回の参加は取り止めるように説得されたようでしたが、頑として聞き入れなかったと伺っております。今回が最後の活動であった事と第1回からの団長としての責任感から無理をされたのだと思います。

現地に着いてから体調は更に悪くなり、午前中は

診療され、午後はベッドに横になる状態だったようです。同行された横須賀市医師会副会長の船山道敏先生も、見るに見かねてヤンゴンに戻るように説得されたそうですが、聞き入れてもらえなかったそうです。現地での先生の活動の様子を撮った写真を拝見しましたが、疲労と脱水のため目は落ちくぼんで頬はこけ、日に日に体調が悪くなっていく様子がわかり、胸がしめつけられる思いがしました。

今回の活動を全てやり終え12月31日、点滴を受けながらバスで10時間かけてヤンゴンに戻って来られました。ホテルの部屋にたどり着いて間もなくショック状態に陥りました。ベッドにうつ伏せになりながら、「今倒れるわけにはいかないんだ。おやじが落胆するから」と苦しそうに喘ぎながら話されたそうです。すぐに市内の病院に救急車で運ばれ、種々の処置が施されました。薄れ行く意識の中で「ここは横須賀か?」、「そうか、まだミャンマーか。」と話され、これが最後の言葉となりました。翌1月1日午前9時30分(日本時間で正午)、種々の処置の甲斐なく息をひきとられました。先生の訃報は現地の新聞にも報じられ、現地の多くの方々も先生の死を悼んだそうです。

先生の「横須賀に戻りたい」という強い気持ちを汲んで、火葬にせず御自宅に戻られました。棺に向かって茂先生が「よくやった。よくやった。」と声を掛けられましたが、そのお姿はあまりにお気の毒で、つらそうで、涙が止まりませんでした。

先生が亡くなられた後、先生が市から委託されていた仕事の割り振り作業をしました。養護学校の校



亡くなる4日前に活動メンバーと共に

医をはじめ、知的障害児、肢体不自由児、病弱児、視覚障害児、聴力言語障害児の専門委員など、その数の多さに驚かされました。またその全てが弱い立場の人に対する支援活動です。アジアで最も貧しい国と言われているミャンマーでのボランティア活動もそのひとつだったのだと思います。

御自分の葬儀代と思しき金額を残して全ての預貯金が、誰にも相談せず施設や団体に寄付されていた

ことが亡くなられた後、送られて来た感謝状などでわかりました。先生は覚悟されて今回の活動に参加されたのでしょうか。弱い立場の人のために一生を捧げてこられた先生らしい最期だったと思います。今までの温かいご指導本当に有難うございました。身をもって医師のとるべき姿をお示し下さいました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

## 厚木市医師会女性医部会について

厚木市医師会 女性医部会長 塩塚 瑛子  
(厚木市 塩塚小児科医院)

厚木市医師会は、厚木市、愛川町、清川村の三市町村の医師会で会員数219名です。

その内女性医師は28名、この数年増加しています。内科、小児科、産婦人科、精神科、眼科、皮膚科、耳鼻科、形成外科、在宅ホスピス、産業医とそれぞれの専門分野で活躍しています。近年女性医師の増加を反映して女性医師の特色を生かした医療、医師会活動が社会的に多方面より期待されて来ました。これらの要望に対応出来る体制の検討がなされました。植原 哲会長、女性医師会員の間で女性医師部会設立にむけた準備が進みました。

女性医師は、日常の診療、様々な医療活動の他に家事、育児、主婦としての雑用など多忙である中、更に女性医師部会の発足は先生方の賛同が得られるか不安でした。日常の医師会の会合ではお会いする機会の少ない先生方相互の親睦からと、ホテルでフランス料理のフルコースで楽しい雰囲気の中、設立総会が15年6月に開催されました。初対面の先生方もいられるので、まず自己紹介からはじまり部会長、運営委員4名が選出された後、今後の活動方針と初年度の事業について検討しました。設立と共に女性医師部会への様々な依頼があり、部会への要望と期待の高まりを痛感しました。以下、初年度の活動を記載致します。

- (1) 厚木市立病院「女性医師による女性総合外来」と女性医師部会医療機関との連携。18女性医師医療機関承諾。
- (2) 厚木市保健センターフェスティバル「女性市民への女性医師相談コーナー」(15年11月8日、9日開催)への女性医師派遣。

- (3) 講演会開催「こどものこころの発達とかかわり方」(15年12月4日開催)

講師：奥山真紀子先生(国立成育医療センターこころの診療部長)

- (4) 愛川町「女性のための保健医療相談」(第3土曜日、1:30~3:00)への女性医師派遣  
初年度15年に引き続き、16年6月に総会及び懇親会を開催、女性医師の親睦を深める会よりはじまり、以下の事業を致しました。

- (1) 厚木市立病院「女性総合外来」との病診連携
- (2) 愛川町「女性のための保健相談」(毎月第3木曜日)への女性医師派遣
- (3) 16年9月 厚木市医師会虐待防止委員会設立。
- (4) 神奈川県医師会報に女性医師部会設立の掲載  
執筆者：今岡千栄美先生
- (5) 厚木市保健センターフェスティバル「女性医師健康相談コーナー」(16年11月13日、14日開催)への女性医師派遣
- (6) 講演会開催「児童虐待防止の早期発見と防止」(16年11月25日開催)

講師：山田不二子先生(秦野伊勢原医師会員・かながわ子ども虐待ネグレクト専門家協会副代表)

- (7) 講演会開催「更年期と上手につき合しましょう」  
講師：善方裕美先生(横浜市大産婦人科)

以上、厚木市医師会女性医師部会より2年間の活動について記載いたしました。女性医師の先生方、会長はじめ男性の先生方のサポートもあり、様々な活動が出来ました。17年度、3年目の活動も女性医師の特色を生かし地域の方々に貢献出来る事業をプランニングしたいと思います。

# Super lady visits a Pediatric ward !!

向山 秀 樹 (横浜市中区 向山小児科医院)

桜も綻び、麗らかな4月の日曜日の午後、公立大学法人となった、横浜市金沢区福浦にある横浜市立大学医学部附属病院の小児病棟に、一人のスーパーレディーが訪れました。

沢山の“ぬいぐるみ人形”を車にいっぱい詰め込んで、彼女の出来得る精一杯の笑顔も添えて。

彼女は、日本に於けるフィギュアスケートの第一人者である村主章枝（すぐりふみえ）さんです。

6歳よりアメリカのアラスカ州でスケートを始め、15歳で世界ジュニア・フィギュア選手権での入賞を皮切りに、1996年よりの全日本選手権の度重なる優勝、2001年四大陸選手権優勝、NHK杯、世界選手権の上位入賞、2003年のグランプリ・ファイナルでの優勝を経て、ソルトレークに続く、今回のイタリアのトリノの冬季オリンピック出場に向けてエンジン全開中の人であります。

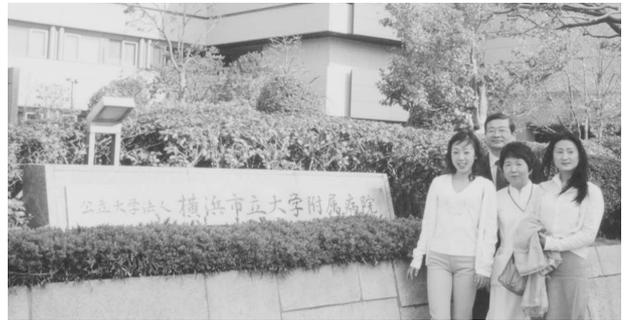
癌の子供達の希望を叶えてあげる“MAKE A WISH”の活動のように、彼女は、競技に出場する毎に、ファンの方々から頂くぬいぐるみを世界中から持ち帰り、少し溜まってくると、各所の子供達の施設を訪問しているとのことで、昨年は、東京都大田区大森の東邦大学医学部附属大森病院（月本一郎主任教授）に行って頂き、主に血液疾患等による長期の入院患児を訪れました。

今年は、横浜市大病院の子供達や、その母親達の大歓声に包まれて、握手したり、写真に撮ったり、サインをしたり、一緒に遊んだりして、病棟中が一日中、笑いに満ち満ちておりました。聞きつけて、当日勤務でない職員も出てくる有り様で、一人の女性の力の凄さを眼の前にしました。

「私は、アメリカ、清泉女学院、早稲田大学と、ずーっとフィギュアスケートを続けてこられた恵まれた環境に感謝しているが、私自身が他の人に出来ることは、氷上に於いて美しく楽しい演技を皆様にお見せすることと、このように個人的に、ぬいぐるみを持って子供達の笑顔に巡り合うことしかできません。」と、微笑みを浮かべて語っておられました。

世界の舞台に上り詰めるための日常の尋常でない努力のうえに鍛えられた精神と身体が、病を得た子供達の優しさと笑顔を引き出してくれるのだと、同行の者一同が感心すること、しきりでした。

子供達の回復と、村主章枝さんの活躍を祈らずにはいられませんでした。



## ・・・ 編集後記 .....

神奈川小児科医会 広報委員長 大川 尚 美  
(横浜市港北区 大川小児クリニック)

平成17年度より年2回の神奈川小児科医会ニュース発行が決まったが、なんとか無事にその1回目を会員の諸先生方にお届けすることができ、ほっとしている。今回は楽しい内容、胸をしめつけられる内容、さまざまだった。今後、より内容を充実させ、将来的には小冊子の形に発展させて行きたいと思っている。

.....